



Title	＜紹介＞島津忠夫著『『源氏物語』放談 どのようにして書かれていったのか』
Author(s)	間中, 真紀子
Citation	語文. 2017, 109, p. 73-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

島津忠夫著『源氏物語』放談 どのようにして書かれていったのか

間 中 真 紀 子

島津忠夫氏は名古屋の「源氏の会」において四十五年間『源氏物語』の講義をされた。その中で氏は特に『源氏物語』の成立論に関心を寄せられ、それに関しての放談を講義の中でするようになり、そのことを筋立てて書かれたものが本書である。

氏は『源氏物語』の成立を考える上で「伏線」と「芽」に注目しておられる。「伏線」とは「一つの巻を書いている時に、どのあたりまで見通しての構想を持っていたか」、「芽」とは「後から読んでみれば、「伏線」のように見えるけれども、その時は何気なく書かれていたのが、後の巻を書くにあたって、その部分を詳しく展開してゆく」と述べておられる。これら「伏線」と「芽」の視点から『源氏物語』がどのように書かれていったのかを解いておられる。

本書は三十の項目に分けられており、具体的に『源氏物語』の内容に踏み込むのは「四 短編から長編へ―伏線と芽―」である。ここでは紫式部が五十四帖という長編を一気に書き上げたのであること、また現在『源氏物語』は三部作と捉えられているが、最初からこのような構想の下に書かれたものではないだろうこと、そして第一部（桐壺）―藤裏葉）は現在読まれている順序の

ように「桐壺」から順に書かれていないだろうといったことを考察しておられる。現在読まれている順序で書かれていないという点については、次の章「五 最初に書かれたのは「若紫」か―帚木三帖と「若紫」と―」でさらに詳しく書かれている。この五章では、紫式部が『源氏物語』を書いていた当時は、「桐壺」より早く「帚木」が書かれ、さらに「帚木」よりも「若紫」の部分が先に書かれたのではないかと考察しておられる。また当時の読者も、現在の読まれている順に読んでいたわけではないだろうことが、この章を読むとさらによくわかるのである。

氏はこのように、最初に書かれたものはどの巻か、またさらに「桐壺」はいつ書かれたのか、長編化はどのようになされていったのかといった考察からはじめ、それぞれの巻の展開や位置づけなどの成立に関することを述べておられる。

『源氏物語』の成立論について詳しくなければ、『源氏物語』は現在読まれている順序と同じように当時の読者も読んでおり、また紫式部も「桐壺」から順に書いていったと考えてしまいがちである。しかし本書を読むとそのようなことはなく、『源氏物語』は「桐壺」から順に書かれていたのではないこと、成立には様々なことが考えられ、決して現在のように読まれていなかったことがわかるのである。

（和泉書院、二〇一七年四月、三〇八頁、三、九九六円＋税）

（まなか・まさこ） 本学大学院博士後期課程）